昭和57年6月4日第三種郵便物認可平成29年6月18日発行（毎月18日発行）（5月18日発売）第36巻第6号（通巻422号

新潮45

JUNE 2017
6

特集■私の寿命と人生

俺が死んだら もう俺を語れる奴はいない
梅宮辰夫

ボクが尊厳死協会に入ったわけ
蛭子能収

「つなぎ融資の女王」山辺節子

カネと男と詐欺の履歴書
上條昌史

緊急対談

小池百合子、偽りの「都民ファースト」
片山善博×郷原信郎

新潮45 6 JUNE 2017

特集 私の寿命と人生

俺が死んだらもう俺を語れる奴はいない ガン手術8回の死生観 梅宮辰夫……22

ボクが尊厳死協会に入ったわけ 14歳、死は常にそこにある 黒沢年雄……27

実際の長生きは苦しい 末期ガンの夫を「家で看取る」人間は「使い捨てカメラ」である 蛭子能収……31

なぜ「死」があるのか 科学者による寿命論 別府倫太郎……35

日本上陸「デスカフェ」って何？ 久坂部羊……39

新連載 100歳の肖像 フォトジャーナリスト 笹本恒子 三砂ちづる……43

大江舜……46

田沼靖一……50

福田ますみ……58

歌代幸子……64

「つなぎ融資の女王」山辺節子 カネと男と詐欺の履歴書 懲役10年「声優のアイコ」事件 犯人にされた主人格 上條昌史……80

「神いっき」からの手紙 CIA文書公開で判明！ インベカヲリ★……88

「慰安所」はナチの収容所と同一視されていた 米国から戻ってきた「吉田松陰の短刀」 有馬哲夫……74

もうひとりのファーストレディ イヴァンカ・トランプ大解剖 楫取能彦……162

TVドラマ「やすらぎの郷」の猛毒 山口真由……96

「小池劇場」はポピュリズムの悪魔結合である 林操……154

緊急対談 小池百合子、偽りの「都民ファースト」 前鳥取県知事 片山善博×弁護士 郷原信郎……110

小田嶋隆……246

〔表紙イラスト〕アラン・ドロン 信濃八太郎

〔扉〕表紙のひと アラン・ドロン（写真 ゼータイメージ）……3

神宮球場（写真 広瀬達郎）……8

TOKYO2017

時代の標本 松田コレクションの世界6

宝塚歌劇 華麗なるレビュー……10

明日も汽車の中で眠る6 シベリア鉄道9000キロ 6泊7日の旅が終わるとき……12

〔巻頭随筆〕風が時間を 徳岡孝夫……15

人間関係愚痴話 曽野綾子……16

デザイン……大野リサ＋川島弘世
目次 写真提供……時事通信社

年に1回はCTスキャンと胃カメラ、そして、膀胱の検査に通っています。膀胱の検査は、鉛筆ほどの太さがある内視鏡を「セガレ」の先端から尿道に入れるんです。麻酔をしているから痛みは感じませんが、なんとも言えない気持ちの悪さがありましてね……。

ちなみにタバコはとっくの昔にやめ、酒も2年前から断っています。実は、食道がんの手術から2年経っても再発しなかったのでワインを飲んだことがありました。すると、15年にまた食道がんが見つかった。自分への戒めの意味も込めて、以降は一切飲んでいません。

もう一点、大事にしていることを挙げるとすれば神頼みはしないということでしょう。実際、過去のがん手術について公言している僕の元には、民間療法や新興宗教の関係者から「お誘い」を受けることも少なくありません。ご利益のある水を勧められたり、ですね。ただ、そうした申し出はすべて丁重にお断りしてきました。一概に否定するつもりはないのですが、経験上、きちんとした専門医に診てもらうことが何よりも大事だと身に染みて分かっているからです。横浜にあるおふくろの墓には月に1度は必ずお参りに行きますが、がんが見つかっても治療の報告をするだけです。

比叡山延暦寺で「お葬式」

これだけがんと向き合い続けていると、自然と死について考える瞬間も多くなりますね。そのせいで達観している部分もある。昔と違っていまは人間的にも丸くなって、虚勢を張ることもなくなった。撮影現場やコンサート会場で誰かと共演しても、僕のほうから楽屋に挨拶に出向くようになりました。共演相手が自分より若くても全く構わない。一方で、この達観には危険な面もあってね。一流の芸人、アーティストには「険がある」わけで、その部分を無くしてはマズいな、とは思います。

僕は、検査と手術によって治る見込みのあるがんで命を落とすことが「寿命」だとは考えていません。ただ、これまでは幸運にもがんを早期に発見できて、転移もなかったわけですが、今後も同じことが続く保証は何処にもない。もし、改善の見込みがない重篤ながんが見つかったら、その時は静かにこの世からオサラバしたいと思っています。女房にも、「いよいよの時になったら延命措置はしないでほしい。そのかわり、痛み止めのモルヒネはバンバン打ってくれよな」と伝えてあります。

これまでの度重なるがん闘病で、家族や親類をはじめ、色々な人たちに心配を掛けてきたのは事実でしょう。だからこそ、最期くらいは誰にも迷惑を掛けたくないという思いは人一倍強い。延命治療を拒否するのも、寝たきりのままズルズルと生き長らえて家族の手を煩わせたくないからです。同じ理由から、早々に済ませてしまったことがあります。

実は、昨年の3月14日に、僕は自分の「お葬式」をあげたのです。場所は天台宗の総本山がある比叡山延暦寺でした。テレビ番組のロケで天台宗の僧侶と知り合い、その方から教わったのが、生前に執り行う「特別永代祠堂」でした。これは本来、人間にとって理想的な儀式なのだとか。やり方はこうです。僧侶につけてもらった戒名を位牌に入れ、それを延暦寺の阿弥陀堂に納める。ちなみに、僕の戒名は「英勝院智俊慈道居士」と言います。なかなか良い戒名でしょう？　いまは位牌に入れた「慈道」の文字が朱色なのですが、僕が亡くなると黒く塗られるそうです。先日の「お葬式」では、この位牌を前に僧侶が祈禱してくれました。今後も、僕が生きている間は健康で精いっぱい仕事に打ち込めるように、また、僕が亡くなったら魂の安寧を永遠に祈ってくれる。

僕のお骨のうち半分は延暦寺に納めて、最終的には比叡山に散骨してもらいます。そして、残りの半分はおふくろが眠る墓に納めるつもりです。立派な阿弥陀堂でお葬式まで済ませたわけですが、やはり最後の望みはそこに尽きますね。おふくろから生まれて、おふくろの元に帰るということ。天国のおふくろと会った時に「年男、よく頑張ったね」と言ってくれたら、これ以上の大往生はないと思います。

45

ボクが尊厳死協会に入ったわけ

蛭子能収（えびすよしかず）
漫画家
1947年長崎県出身。73年に『ガロ』誌でデビュー。著書に『ひとりぼっちを笑うな』『蛭子能収のゆるゆる人生相談』など。

僕、死にたくないんですよ。

死にたくないと思いながら、この70年間生きてきたんです。

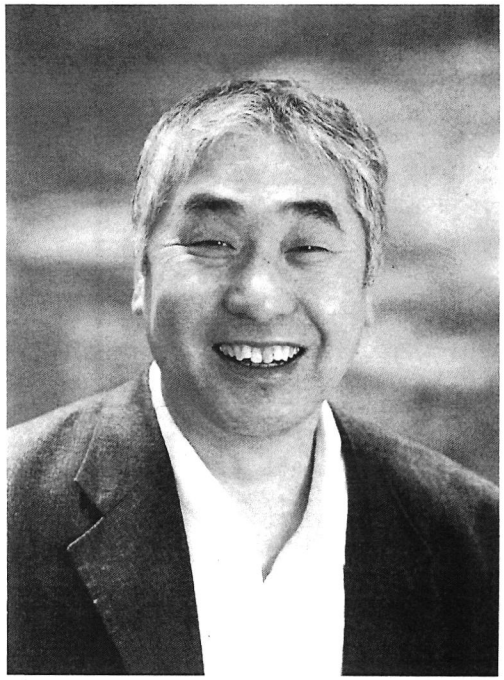
だって、死ぬのって怖いじゃないですか？　一度きりの人生なのに、死んだら何もかもなくなっちゃう。70歳にもなるのにジタバタすんなよって言われそうだけど、そりゃあ長生きしたいですよね。やっぱり死んだ世界より、生きてる世界の方が楽しそうな気がするんだよね。

子供の頃、地元の長崎で漁師の親父が作ったやぐらによじのぼって、よく星を見てたんです。夏、家にいると暑いから、シャツ一枚になって寝ころんで。本当に星がいっぱいでね。

空を見上げてたら、シューッと流れ星が消えていく。今はもうそんなに空を見る機会がなくなったので、流れてるのか分からないけど、あれが不思議でたまらなかったですね。地球みたいに大きな星が、流れて消えていってしまうんです。

それを見てたら、僕の命もあんな簡単になくなるのかなぁと、なんだか怖くなった。死んだら何もかもなくなるんだな、だったら死にたくないな、って……。

その頃から、死ぬのが嫌だという気持ちは変わってません。30歳を過ぎて漫画家になったんですけど、死にたくない、殺されたくないから、マンガの中ではやたら人を殺しました（笑）。僕のマンガ



はすぐ人が死んじゃうんだけど、それは生への執着が強いことの裏返しなんですよ。逆をいってるんですよね。

人間、年老いてくると早く死にたいとか、死ぬのが怖くなくなってくるとかいうけど、全然そんなことない。今も死ぬのが怖くて、できるだけ死なないように生きてるつもりです。

危険な仕事だって、もうしたくない。

数年前、バラエティ番組のドッキリで怖い思いしたんですよ。ある部屋にドアを開けて入ったら床がトリモチになって動けないんです。困ったなと思ってたら円盤状の床がぐるぐる回り出した。

「わ、すごい！　目が回る」。あれは怖かったですね。死ぬんじゃないかと思いました……。ところがしばらく回ってたら、ふと気づいたんですよ。「あ、下を見たら大丈夫なんだ」って。床を見れば一緒に回ってるから全然目が回らない。なるほどと思いましたね。さすがにそんな仕事は危険だから、もうやらないようにしています。

たった一度泣いたとき

死ぬのはできるだけ避けているんだけど、そうこうするうち周りの人がどんどん死ぬようになりました。

でも、たとえ親しかった人でも葬式には行きません。人の葬式に行ったらニヤニヤ笑っちゃって怒られるからというのもあるけど（笑）。どういうわけか人が死んでもあんまり悲しくならない。全然涙も出ないんです。心が冷たいのかもしれないですね。

そんな僕でもたった一度、涙を流したことがありました。前の女房が肺高血圧症で死んだときです。20代で一緒になって、僕のギャンブル狂いにも文句一つ言わず、本当によくしてくれた女房だったんですけど、彼女が51歳のとき、具合が悪くなって倒れたんです。病院にかけつけると既に昏睡状態。意識が戻らないまま2日後に亡くなりました。

葬式では自然と涙が出ました。本当に悲しかったですよ。一生分の涙を流し尽くしたんじゃないかと思うぐらい泣きました。女房とほかの友人の何が違うのか、と聞かれてもうまく答えられないけど、それだけ大事な人だったんだと思います。でも、あんまり前の女房のことを話すと、今の女房に怒られるから止めた方がいいな（笑）。

今の女房とは雑誌の企画で知り合って、2007年の1月に入籍。今年で10年が経ちました。

いい女房です。……と言っておきます（笑）。20歳近く年下だけど、ちゃんとした考えを持っていて、芯が強いんですよ。いつも怒られてます。

これまで僕は自由に生きていきたいと思っていたし、実際そうやって生きてきました。でも、今の女房に出会ってから、ちょっとずつ考えが変わってきたんです。

ギャンブルが大好きだったけど、最近は麻雀も全然してないし、競艇もあんまり行ってない。忙しいというのもあるけど、女房が僕と一緒にいたいって言ってくれるんです。これまで結婚しても一人で遊んでることが多かったので、女房孝行みたいのをあんまりしたことがないんですよね。そういうことをやっていかなきゃいけないな、と。

といっても二人で喫茶店に行って、のんびりしてるだけ。そんな大したことはしてないし、色々話をするわけでもありません。でも、楽しいんだよね。喫茶店に行くぐらいで楽しいというのも変な気がするけど、一緒の時間を過ごすことが小さな幸せなんです。向こうはもっと色んな所に連れていけと思ってるかもしれないけど。

いっそのこと殺して

「日本尊厳死協会」に入ったのも、数年前の女房の一言がきっかけでした。

「体が正常に動いてなくて、しゃべることもできない、もしそんな寝たきりの状態になったら、ずっと生きててもしょうがないよね」って女房が話してて、ああ、確かにそうだなと。それで一緒に入会したんです。

それまで尊厳死については考えたことがなかったし、深く考えて入会したわけじゃない。実際この記事の依頼が来るまで、尊厳死協会に入ってたことすら忘れてたんだけど（笑）、その考え方には賛成ですね。

薬とか注射だけで命を延ばすぐらいだったらいさぎよく死を選びたい。治るんだったら別ですけど、どうせ治らないと

朴槿恵（박근혜）心を操られた大統領

新聞・テレビでは絶対にわからない
青瓦台のプリンセス、洗脳の40年。

大統領の異常事態
●崔順実は「親友」ではなく、親子二代の「黒幕」
●朴正熙大統領暗殺犯の動機に「崔一家問題」
●バイアグラやプラセンタを官邸が公費で大量購入
●セウォル号事件当日も、「独りの食事」に変更なし

金香清
●定価（本体1350円＋税）
文藝春秋
〒102-8008 東京都千代田区紀尾井町3-23
http://www.bunshun.co.jp

わかっているなら薬ももったいないし、早く死なせてほしいと思ってます。尊厳死協会に入ると会員カードを渡されます。そのカードは、自分がもし病気になって薬だけで延命治療を続けるような状況になったら、死なせてくださいという意思表示になるんですよ。

僕はとにかく人に迷惑がかかるのが嫌なんです。入院が長引いたら家族も看護師さんの手も煩わせますし、なるべく周りに迷惑をかけずに死にたい。だから尊厳死がいいというのもあります。

ただ実際、そのときが来ないと分からない部分もありますよね。

もし女房が寝たきりになって尊厳死を選択するような状況になったら、どうすればいいか迷うだろうなぁ。尊厳死を望んでいると言っても、死んでしまうわけだから……。でも「決めたことなんだからその通りにしないとダメでしょ！」って女房に怒られそうなんで、あっさりあの世にいってもらうかもしれません。今のところはできると思ってますけど、そのときが来ないとなんとも言えないですね。

でも、また女房を看取るなんて嫌ですよ。勝手な考えかもしれないけど、できれば先に死にたい。最期は女房にベッドの横にいてほしい。「今日忙しいからダメ」って言われるかもしれないけど（笑）。いてくれたらありがたいですね。

植物状態にある人でも、死ぬときには怖いって思うものなのかな？　僕は人の迷惑にもなるし、本当にそうなったらどうにかしてほしい、いっそのこと殺してほしいです。でもいざ管を抜かれそうになったら急に元気になって逃げ出したりして。

人生最後の日は競艇

実は最近、忘れっぽくなってきたんですよ。だから今、必死に抵抗してるんです。ときどきこうやって、両手別々の動きをする練習をしています。左で三角、右で四角を描くように手を動かす。脳に良いらしいんですよね。あれ、うまくいかないな。久しぶりにやったから忘れちゃいましたね。

元気で生きてても、呆けてしまって何にもわからない状態というのはどうかなと思いますね。そうなったら早く死んだほうがいいかもしれない。呆けてしまった上に病気になったらどうなるんですかね。あんまり想像したくないです。ゴミ箱に捨てられたりして……。

一番いいのは元気で頭もはっきりしているときに安楽死することですよ。

日本では禁じられてるけど、できることなら安楽死したい。好きな音楽を聞きながら眠るようにして死ぬんですよね。いいですね。そういう方法で死にたいな。まぁ音楽はあんまり好きじゃないんだけど。

僕が死んだら、葬式なんかに金はかけなくていい。意識もなくなってどうせ分からないから、棺桶に何も入れなくていいし、僕の骨もぐちゃぐちゃにしてくれていい。海に捨てても、食べてくれてもいい（笑）。もう僕は怒ることもできないし、関係ないですから。あとは生きてる人だけが幸せになってくれればいいんですよ。

でも……出来ることなら死にたくないですね。やっぱり生きてる方が楽しいです。死にたくないと思えてるのは、人生生きててよかったという証かもしれないですね。

人生の究極の目標は死なないこと。

死ぬにしても、直前まで元気に、寿命を全うしたい。生きられるだけ生きたい。仕事も生きてる限りはやりたいし、女房との時間も……。

まぁ、でもほんとのこと言うと、遊ぶだけ遊んで死にたいよね（笑）。最後の2、3年は仕事もやめて、毎日ギャンブルだけして暮らしたい。麻雀もやりたいですね。あ、あんまり言うとマズいな、これは。

人生最後の日は、競艇に行こうと思ってます。財布は女房が握ってるからあんまり多くは賭けられないので、とりあえずポケットに入ってる金を全て賭けます。

そうしてポックリ死ねたらいいけど、もし病気で寝たきりの状態になるようなことがあったら延命治療は要りません。早く死なせてください。でも女房が尊厳死協会の会員カードを隠したりして（笑）。それはそれで僕と一緒にいたいってことだから嬉しいかもしれないなぁ。

45

14歳、死は常にそこにある

別府倫太郎（べっぷりんたろう）
文筆家
2002年、新潟県十日市市生まれ。学校に行っていない中学生。5歳で全身性脱毛症、7歳で小児ネフローゼを発症。本年、『別府倫太郎』（文藝春秋）を刊行。

死は
私を均等に
保ってくれる
海にしずんだ
いかりみたいなものだ
たゆむことなく
待ち構えることもなく
死は常にそこにある

死がある所に力は働き
私の肌にそっと
触れてくる
死のまわりに
私の感情はあり
死に突き動かされて
私の感情は常にうごめいている

死は静かな力を持って
私に問いかけている
死のことを考えると
生気が私の元にやってくる
夜のことを考えて
やがて朝が訪れるように
私は死ということを
考えて
生きている
ということになる

でもかと繰り出す。

医療者も、自分たちの実績を誇示するため、がんは治る時代になったとか、認知症でも自分らしい生活をなどと、調子のいい話を吹きまくり、製薬業界も売り上げを伸ばすため、医者と共謀して、早めの服薬、より安心な投薬をと、のまなくてもいい薬を山ほど患者に押しつける。

当たり前のことだが、若返りの薬とか、魔法の秘薬でもないかぎり、自然な老化を止めることはできない。人間の力はそれほど偉大ではない。その事実を隠して、あたかも病気も老化も克服できるかのように見せかけているのが、今の医療界と健康関連業界である。

甘い言葉で誘惑し、ときには不安を煽り立て、偽りの希望と安心を蔓延させて、無用な検査や健診を受けさせ、健康な人間を病人に仕立て上げ、効果も定かでない薬や健康商品を売りまくる。すべては長生き欲につけ込んだ悪辣な商法だ。

では、どうすればいいのか

別に早く死んだほうがいいとは言わない。要は自然な寿命を受け入れることである。

寿命を受け入れるということは、死を受け入れることで、その境地に達すると、多くの煩いが消えて心が安らかになる。死を拒絶していると、あれをしてはいけない、これをしなければならないと、いろいろ辛抱と義務を押しつけられ、先のことばかり気になって、今を楽しむ暇がない。

死を受け入れるのはむずかしいと思うかもしれないが、そんなことはない。いつも死のことを考えていれば慣れるし、あきらめもつく（ヤケクソのあきらめではなく、明らかに観るという意味のあきらめ）。

可能なら、できるだけ多くの死を見るのもいいだろう。私は医師として多くの患者を看取ったが、どんなに死を恐れ、拒絶し、悲しんでいる人でも、みんな死に顔は無表情だった。つまりは悪くないということ。自分が失われることを恐れる人もいるかもしれないが、毎晩、目覚める保証もなく眠っているのだから、それと同じと思えばいい。

今はがんは老化現象のひとつと目されている（細胞のがん化はDNAのコピーミスが原因で、長く生きればその確率も上がるため）。心筋梗塞や脳血管障害なども、長く身体を使っていれば起こって当然の変化で、内臓の機能低下も当たり前のことだ。すなわち、自然な寿命。それを病院などに行くから、無理やり死を遠ざけられ、不自然な長生きをさせられて、想定外の苦しみを味わうことになる。

無益な延命治療を拒否する人も多いが、そのもっとも確実な方法は、病院に行かないことだ。病院にさえ行かなければ、延命治療はもちろん、長々待たされることもなく、つらい検査を受けさせられることもなく、高い医療費を取られることもない。いいことずくめだ。

とは言え、病気になったり、つらい症状があれば、病院でなんとかしてほしいと思うのも人情だろう。医療で治るものは治してもらえばいい。しかし、だらだら行くのはよくない。一カ月か二カ月通ってよくならないなら、医療は無力とあきらめたほうがいい。

心底、寿命を受け入れる覚悟ができれば、自ずと病院になど近寄らなくなる。そうすれば、時間も心も肉体もゆったりして、今、生きていることのありがたみがわかるだろう。

末期ガンの夫を「家で看取る」

三砂ちづる
作家・津田塾大学教授

1958年山口県生まれ。京都薬科大学卒、ロンドン大学PHD（疫学）。『死にゆく人のかたわらで ガンの夫を家で看取った二年二カ月』など著書多数。

看取りの経験の圧倒的不足

約二年前、末期ガンの夫を家で看取った。夫がそれを望んだのだ。私は、「自然な出産のありようがどれほど女性を力づけるか」というような研究をしてきたから、近代的設備の整った病院ではない「家」や「助産所」と呼ばれる場での、プロの出産介護者はかたわらにいて助けてくれるものの、基本的に自分の力で、自分の場所で「産む」という経験がどれほどその後の女性と子どもの暮らしを支えうるか、ということがよくわかっている。産む場所が自宅に近いほど、励まされる経験が残るならば、死にゆく経験もきっと自宅に近い環境であればあるほど、本人はおだやかに逝くことができ、周りにとってはその死の受容が穏やかなものになるのではないか、という直感を持っては、いた。これほど人間の歴史が長い間続いてきたのだから、その生と死は、基本形として穏やかなものであるのではないか、という人間存在への信頼、とでもいうようなものがあったのだ。だから夫が家で死にたい、と言い始めたとき、ぜひそうさせてやりたい、と思った。

夫を家で看取ってやりたい、と、思い始めはしたが、当時の私は、50代半ばも過ぎて、人生は黄昏時、いい年をしているというのに、病んだ人、老いた人を、日々、つぶさに観察し、お世話をしながら看取った、という経験などないのに気づいて、愕然とした。すべての人間は死ぬというのに、この経験不足はいったい何ごとだ。これは、あらためて気づいて、呆れるほどにびっくりすることだった。事故や事件や天災による突然死でなければ、そして多くの人は、突然ではなくて、それなりに病を得たり、ただ、老いたりして、ゆっくりと死んでいくのであるが、具体的に一人の人が「ゆっくりと普通に死んでゆく」という経験に付き添ったことが、普通に家庭を持って、子どもも育て、介護もしたつもりになっている、還暦前の女に、まったくない、のである。もちろん私自身がだらしない、ということもあるが、私の周囲の同世代の友人たちを見ても似たようなものだ。この年代の女がそういう経験がない、ということは、この国では、今、医療、介護の専門

家以外の普通の人は、人を看取ることにおいて、信じられないくらいの圧倒的経験不足に陥っているということではないのか。家で誰かを看取る。それはあまりにも私たちの「日常」とかけ離れたできごとなのだ。

祖父母が亡くなった、と言って、駆けつけたら、彼らはすでに亡くなった後だったり、父も義母も看取りはしたが、結局、彼らは施設で亡くなったのであったりして、その死にゆく姿に日々付き合っていたわけではなかった。病院にいたり、施設にいたりしたら、そこにいる人たちの「日常」とは、その病院や施設で医療関係者や介護関係者と過ごす生活こそが「日常」なのであって、いくら家族が足繁く、毎日通おうとも、家族との時間は、「非日常」なのである。「じゃあね、明日また来るね」と言って帰れば、施設にいるものにも、自宅に帰るものにも、別の「日常」があるのだ。

それは、既婚者が別の人と恋愛をしている時、つまりは世の中で不倫というような関係を持っている時、その相手といくら親密な時間を過ごしても、それはあくまで「非日常」の世界なのであって、「じゃあね」と言ってお互いの「日常」にかえらなければならないのと、少し似ている。そういう時、恋愛している当事者たちは、文字どおり、思うように会えない「非日常」の輝きに、平凡な「日常」を生きていく力を与えられているのかもしれない。いいとか悪いとかいう倫理的判断は別として。それと似たようなことだと考えれば、病院や施設にいる人を「非日常」として見舞うことは、お互いの日常から離れて、その上での関係の「輝き」を、今一度取り戻しながら、冷静に、かつ愛情深く最後の時間を付き合うことにつながる、と言えないこともない。良いように解釈すれば、であるが。いや、それにしても。そのような解釈も、私たちの日常の生と死の場における「圧倒的経験不足」の言い訳にはならない。

経験不足の中、それでも、夫が望むのだし、私もそうしたいのだから、「家で看取る」をやってみた。一例だけやったから、と言って、私の圧倒的経験不足がしっかりと補われたわけではない。しかし「圧倒的経験不足」は「まだちょっと経験が少ない」程度には、変わっていった。そして、死にゆく夫と一日、一日を過ごした経験、私の腕の中で夫が息を引き取っていった経験は、自らの人生について、死について、寿命について、の私自身の考え方を、やはり、変えた、と思う。

当たり前といえばあまりに当たり前のことなのであるが、「死」をとても身近なものに感じるようになった。私たちは皆、死んだことがないから、死は恐ろしい。恐ろしくて、よそよそしくて、避けたいものだった。考えたくもないものだった。今も思うのだが、夫は、これ以上痩せられないくらい痩せてもいたし、食べられなくもなっていたのだが、最後まで今日死ぬ、とは思っていなかっただろうと思う。亡くなるその日まで、普通に話をしていたし、心を通わせることができた。そして、ふっと向こうに行くように、死が訪れた。玄関を開けて外に出るように、窓を開けて外の空気を吸うように、電車に乗ってどこかに行くように。それはただ日常の連続の中にあり、本人も、気づいたらびっくりしているんじゃないか、死んでしまっていて……、と思ったくらいだ。生と死は全く違うところに存在している、と思っていたけれど、きっとそうではない。この生のすぐ隣に死はあり、それは、ふっと向こうに行ってしまったように、突然訪れる。突然の死であったりすれば、なおのこと。苦しんだり、天災、人災にあったり、悲惨な死に方は多くあって、それはゆっくり死にゆくことと比べ、残される者には、本当に辛いことではあるのだが、それにしても、いかなる意味でも、死は生の、ごく、そばに、ある。

死は終わりではない

そしてもうひとつあらためて、しみじみと感じていることがある。死はいかなる意味でも、終わりではない、ということ。夫は、団塊の世代の代表のような唯物論者であり、信仰は持っておらず、死後の世界など信じてもいなかった。「死んだら終わり」だ、と、常々言っていた。何も残らない、何もない、死んだら終わりなのだ、と。しかし、見よ。私は夫の死後、彼の人間関係の中で、まだ、生かされている。彼が死んだことで、彼の周囲の人との関係は新たなものとなっていったし、書くことを考えてもいなかったような文章も書くことになっている。だいたいこの原稿も、私が彼を看取った本を書いたから、ご紹介頂いた仕事なのだ。彼は私を文字通り動かし、支えてくれているのだ。スピリチュアルなこととか宗教的な経験とか霊的な経験とか言わなくても、私は彼の存在をとても身近に感じている。いつも彼と対話しているし、彼の存在に照らされている。今となっては、本人に、問い詰めてみたいくらいだ。ほら、死んでも終わりじゃないじゃない、どう思ってるの、と。

そのように思えば、何を思いわずらうことがあろう。死は、目の前の四つ角をふっと右にまがるように訪れる身近なものであり、今、ここに生きていることそが奇跡なのだ。そして私が今、死んだとしても、いかなる意味でも終わりではないことを私は知っている。私が関わった人たちの間に、私は生き続けるのであり、その人たちを通じて、その人たちを変え、関係性を変え、世界は変わってゆく。とても小さな範囲で。でもその小さな範囲の総体として、大きな世界があると思えば、どのような人のどのような生も、生きていても死んでいても影響を与え続けるのだ。

たった一人の人を家で看取ったことだけで、えらそうなことを言うな、と言われるかもしれない。しかし、一人の人を看取ったことで私に訪れたこの死への落ち着きと、死を思いわずらうな、という静かな確信は、今の私を支え、今の私の一日を宝石のようにきらきらと輝かせてくれている。人の育ちに寄り添う、弱くなった人の世話をする、家で人を看取る……。身近な人の生を全うするプロセスに付き合うことは「女性が自分の人生を生きるための邪魔」なことであるから、できるだけ公的機関に任せよう、としてきたことで、失ってきたものは、自らの

日々の輝きであったことを、この歳になって気づいたのならば、次の世代に残さなければならないことはやはり、「圧倒的経験不足の解消」に向けて何ができるのか考えていくこと、と思わざるを得ないのである。

人間は「使い捨てカメラ」である

大江舜（おおえしゅん）
ジャーナリスト
1948年香川県生まれ。慶應義塾大学卒。出版社勤務を経て著作活動に。社会時評を中心に、翻訳なども手がける。著書に『日本「馬鹿馬鹿」講座』（講談社）。

運を天にまかせるしかない

「誰だって一度は死ななければならないんだよ。もういいじゃないか、いつ死んだって。ここまで生きたんだから、あとは余生」

夕食が終わった頃を見はからってかけた電話でそう言うと、肺癌治療を続ける友は大いにあわてた。

「ちょっと、ちょっと待ってくれ。俺はまだ死にたくない。君のように悟りきれない」

「人生七十古来稀なり」と杜甫の詩にあるが、団塊世代のこの70歳は絶壁に立ってもまだ死ぬつもりはない。彼は最後の最後に、夢の抗癌剤「オプジーボ」に賭けたのだ。

「元気そうな声じゃないか。きっと薬が効いているんだ。ゾンビのごとくよみがえったか。よかった。普通ならとっくに死んでるところだよ」

「おい、ウィスキーでも飲んで酔っぱらってるのか。悪い冗談はよしてくれ」

おたがいに癌患者同士、親友だから、際どい話もできる。

じつは、この電話の直前、もう一人の友人から、次のようなLINEが入っていたのだから、悪い冗談どころではなかった。こんな交信をした。

「10日前に入院した弟が昨夜亡くなりました。癌です。手遅れでした」

「何歳だったのですか？　膵臓癌か何かですか、そんなに急に進行するのは？」

「66歳です。原発は肺腺癌のようですが、肝臓、骨のいたるところに転移していました。2カ月前までいっしょに飲みにいっていたのに」

「残念ですが、ボケるより癌で死ぬほうがいいと思います。みんなに、いい奴だったと惜しまれながら」

「そうですね」

彼は美しいフランス人の奥さんを数年前にこれも癌で亡くして、いまは一人暮らしである。

「でも、無理に死ぬこともありません。生きようという気持ちさえあれば」

「ごもっとも」

それにしてもこの日はいろいろなことが重なった。午前中にはこんなこともあった。

知恵遅れで小学生の時に養護施設に入って82歳になる叔父が肺炎と心不全を併発して救急病院へ搬送された。医者からこんな電話がかかってきた。

「咳がひどく昨日から入院されています。酸素の値が低くなっています。もしもの時に延命措置を望みますか、望みませんか。いったん人工呼吸器をつけると簡単に取り外せなくなります」

そういえばと思い、最近ぷっつりと連絡が途切れ、返信もない友人のことも気になって、このあとすぐ彼が社長をつとめる会社に電話をかけた。63歳の彼は、一度癌で死にかかって、奇跡的に回復していたのだ。だが、こんなためらうような答えが女性事務員から返ってきた。

「はい、体調をくずしまして、入院しておりますが、病院名はちょっと」

人間には天命があり、寿命がある。助かるかもしれないが、だめかもしれない。

最高の医療技術をほどこされた結果でここまでくると、もう運を天に任せるしかない。

自分の場合は、延命措置はいらない。もう充分生きてきたと思う。

友人にも言ったが、あとは余生である。いつ死んでもいい。でも元気なら、無理に死ぬこともない。

老眼鏡さえかければ、この雑誌だって楽に読んでしまう97歳になるわが老母のように頭さえしっかりして、まわりに迷惑をかけることがなければそれでよい。

頭が明晰なうちに、みずからの死に方を決めておきたいと思う。

＊

人間は「使い捨てカメラ」のようなものではあるまいか。そんな突拍子もないことを最近、考えている。

12、24、36枚撮りはそれぞれの寿命である。カメラは風景をその枚数分だけ撮影し終えると、そのまま現像所へ送られる。カメラは解体され、フィルムだけが取り出される。

写し撮られた元の風景といえば、カメラが製造される前からこの世にあったもので、カメラがスクラップになった後も、世界が終わらない限り、かたちを変えながらも、そこに存在し続けるだろう。

現像されたフィルムに何も写っていなかったり、ピンボケなら、その人の人生は虚しく終わったのかもしれない。

風景は残り、人間だけが入れ替わる。毎年、同じ花が咲くが、それを眺める人間は同じではない。

ときどき、そんな人生の無常を考えながら麻布十番の事務所で一日の終わりに、スコッチウィスキーのオンザロックのグラスを傾ける。パソコンに音質の良いアンプとスピーカーをつないで独り聴くYouTubeのジャズが、ごきげんなのだ。

雨の日はことさらだ。4階の窓から見下ろす舗道に映画「シェルブールの雨傘」さながら、色とりどりの雨傘がしっとり行きかい、バックグラウンドミュージックに、ビル・エヴァンスのピアノやビリー・ホリデイ、エラ・フィッツジェラルド、カーメン・マクレエなどのボーカルが美しく響く。いまはもうこの世にいないアーティストたちが鍵盤に繊細な指を躍らせ、あるいはマイクロフォンに恋する女心を熱くささやきかける。もう一度言う。アーティストたちはみんな死